

社会学の歴史と伝統
フォロー
2番手戦略を評価する

カリキュラム ver.X

これまでの社会学

これからの社会学

社会学がかぶっている20の新たな波

2024 宣言

早稲田大学
社会科学部

コンセプトブック 2022

1

社学の歴史と伝統

夜間から昼間へ。社会と関わり、
「なんでも学べる学部」として発展してきた。

社学が夜学だと思っている世間の人もいまだにいるという。夜間の第二学部を統合して1966年に作られた社会科学部は、勤労学生を支援し、実社会に貢献する「社会に開かれた学部」であり、本学の理念を体現したものであった。創設当時の社会人学生と教員間のエピソードは事欠かず(*解説1)、年齢が近いことも手伝って教員と学生の距離感も近く、献身的な職員の存在もあり、アットホームな雰囲気が培われた。

一方、第二学部の寄せ集め的な成り立ちは、良くも悪くもその後の社学の性格を規定した。良い面は、学生が自分の関心に合わせてなんでも学べるということだが、反面、社学が何たるかを誰もが簡潔に言い表せるほど、体系化がなされたわけではない。

社学は14号館の建て替え(*解説2)と前後して段階的に完全昼間学部となるが、「社会科学諸分野をどう総合化し、体系化するのか」という問いは今なお継続している。設立から55年で培われた社学の伝統を継承しつつ、発展の方策を探っていきたい。

*解説1

「創設当時は、夜間部でしたから、年を取った人も多かったですね。私が髭を生やしたのはそのせいです。誰が先生かわからないから、髭でも生やして、わかるようにしてくれって生徒に言われ『わかった、じゃあ、そんなら髭生やしてこよう』と。社会人に門戸を開いた学部にしようってことですから、うちにきた社会人、多いと思いますよ。彼らの世代は、生まれた時の生活環境が厳しかったでしょう。その厳しさを通り抜けた連中は、それだけの辛抱強さと情熱を持っていたと思います。」

(名誉教授田村正勝先生へのインタビュー(2016年7月)より抜粋)

*解説2

「どの校舎を最初に建てるかということで、理事会でも、学部長会でも、争いになった。ところがね、古い14号館は、唯一関東大震災にも耐えて残った大正時代の校舎(第二高等学院校舎がその前身)だったんですよ。唯一残っていたんでね、大丈夫じゃない、危ないんだよ(笑)。壁にほら、ひびが入ってるだろうと。(中略)でも、もしこれで地震がきたらね、14号館は死人が出るよと。絶対うちを先にやらなくちゃいかんと。まあそれでもいろいろな反対がいたよ。強い反対がね。でも人の命にかかわることはこっちのほうが先だっていったんだよね。」

(名誉教授田村正勝先生へのインタビュー(2016年7月)より抜粋)

これからの社学

Question

社学が伝統的に持っている良さとはなんであろうか？
良さの裏側にある良くない点、弱点はどのようなものであろうか？



① 1977年の早稲田大学早稲田キャンパス。安部球場(現・中央図書館)の左が15号館(現存)、その隣の口の字形の建物が社学が入っていた旧14号館(大学史資料センター蔵・2348)

② 『社会科学部卒業アルバム』(1974)に掲載された当時の専任教員

上段左から 時岡弘 池島宏幸 植田捷雄
大平金一 大畑弥七 大谷恵教
小林茂 栗山昭一 小野俊夫

2段目 掛下栄一郎 田村貞雄 佐藤和夫
木村時夫 霜田美樹雄 難波田春夫
中内正利 竹下英男 田中由多加

3段目 山之内光躬 服部辨之助 原田謙一
竹川裕淑 井内雄四郎 本戸啓嗣
岡野光雄 佐藤忠夫 高橋悦男

4段目 中林瑞松 長谷川茂 長谷川洋三
速川治郎 武川忠一 森乾
福山仙樹 照屋佳男 永安幸正

③ 旧14号館 1970年代か(大学史資料センター蔵)

④ 旧14号館学生掲示板(『社会科学部卒業アルバム』1979年度より)





旧14号館(左側)脇スロープ。1966年(大学史資料センター蔵・2306)

社会学の50年間(1966-2015)を駆け足で

島 善高先生の原稿から

▶1966-75

社会科学部は、1966(昭和41)年4月、①「勤労生徒のための夜間学部」、②「社会科学系専門分野に関する総合的知識の修得」を旗印として誕生した。当時の早稲田大学は、学費・学館問題をめぐるストライキの真最中。地下鉄東西線が中野・竹橋間に延長された頃である。勤労生徒を対象としていたため、社会学の開講時間は17:25～18:55、19:00～20:30、20:35～22:05の3時限制。タクシーの運転手をしている学生が、車を校舎に横付けにしたまま英書購読の授業を受けるという風景もあった。教室は旧4号館で、教員室も共同(旧14号館に移転したのは創設1年半後の1967年9月)。こじんまりした学部であった分、教員と職員のパワーラインは低く、アットホームな学部であった。教職が同じ部屋で談笑し、飲食し、情報交換し、囲碁を囲み、将棋盤を睨みつけるなど、独特の雰囲気定着していった。その後、高度経済成長ともなあって、入学志願者も1967(昭和

42)年の2444名から1970(昭和45)年の4336名へと年々増加。逆に勤労生徒の数が減少してきたので、1971(昭和46)年から開講時間を15:50(土曜日は14:10)に繰り上げた。

▶1976-85

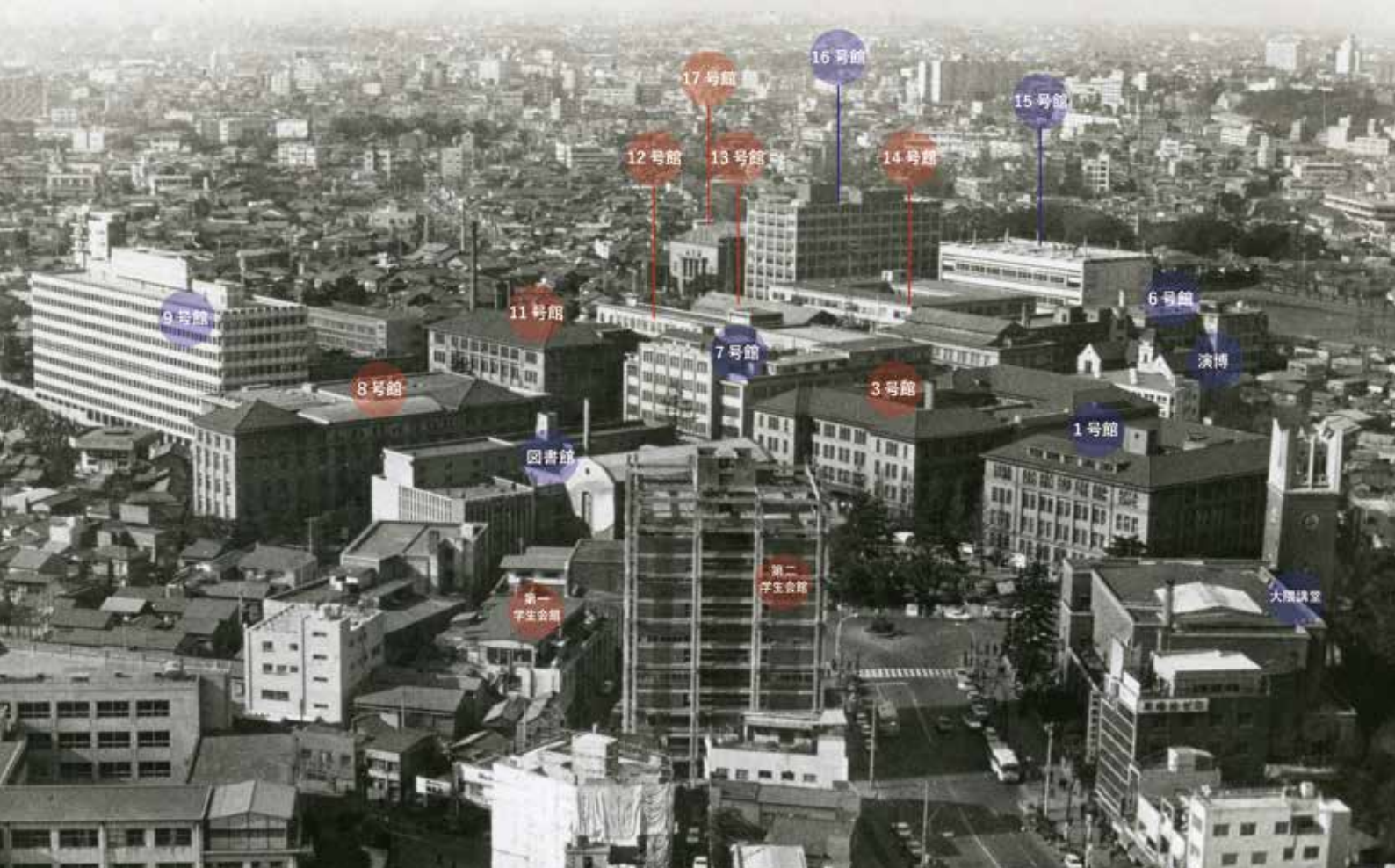
草創期の社会学では、教・職・学生が一丸となって学部発展のために苦心し努力した。その甲斐あってか、社会学の人気も年ごとに上昇し、創立から10年を経た1976(昭和51)年、入学志願者がついに1万人の大台を突破。1978(昭和53)年には、旧13号館が利用できるようになり、学生読書室や教員の研究室も拡充された。それと同時に、社会学が標榜する「社会諸科学の総合」の具体化を目指して、教員たちは切磋琢磨した。1982(昭和57)年、早稲田大学が創立百周年を迎えたのを機に、1983(昭和58)年1月、社会科学部ではシンポジウム「新しい社会科学を求めて—社会科学の過去・現在・未来」を開催し、その成果を出版した。本書は社会の

注目を集め、高い評価を受け、社会学の指針となった。創立百周年前後、社会学を所沢に移転して昼間部にしようとの議論もあったが、本部キャンパスに留まる道を選んだ。

▶1986-95

社会学創立から20年を経た1986(昭和61)年、社会学の有職学生は全体の2.3%にすぎなくなった。学生から始業時間繰り上げの要望が高まってきたので、平日は14:40、土曜日は13:00から講義開始とすることとし、翌年から実施した。

他方、1988(昭和63)年4月、「社会に開かれた学部」を前面に打ち出して、社会人学士入学制度を導入、60余名の社会人学生を3年生に迎え入れた。教場やラウンジで一般学生との交流が深まり、互いに刺激しあう場が出来上がることを期待した。1989(平成元年)年4月には、自己推薦による全国推薦入学試験も導入した。体育や学芸または生徒会活動などの諸分野で目覚ましい活躍をした生徒、英語検



1970年代の早稲田キャンパス(当時は西早稲田キャンパスと呼んだ)。写真に建物名を加筆。青は現存、赤は非現存の建物。撮影年不詳(大学史資料センター蔵・2289)

振り返る

定などの権威ある資格を取得した生徒を、自己推薦に基づいて入学させる制度で、タイプの異なる個性ゆたかな逞しい学生を全国津々浦々から集め、多様性に富んだ活力のある社学を築き上げるためであった。このように社学は、新たな試みに次々と、果敢に取り組んだ。そして1994(平成6)年4月に、夜間大学院である大学院社会科学研究所修士課程も発足、約140名の大学院生を迎えた。学部理念をより高度な地平で具現化する試みであった。

▶ 1996-2005

社学創立30周年を迎えた1996(平成8)年4月、大学院社会科学研究所博士後期課程がスタートし、17名が合格した。そして1998(平成10)年には、悲願であった新14号館が出来上がり、9月から全面開館。社会科学部・社会科学研究所のすべての施設が14号館に收容されることになった。同時に夜間学部を脱して、昼夜開講学部(3時限から開始)へと移行す

ることとなった。これによって女子学生も増加してきて、カラフルな社学となり、また外国人留学生を受け入れることも可能となった。2000(平成12)年になると、「教育のオープン化」が叫ばれ、他機関・他学部で履修した48単位を社学の卒業単位に参入できるようになり、日本女子大学や学習院女子大学へ、「心躍らせて」通う男子学生も出始めた。なお、この時期の出来事として特記すべきことは、1998(平成10)年4月に「社会科学部卒業生奨学基金制度」が発足し、同年9月に最初の奨学生が誕生したことである。社学の第一期卒業生が卒業25年を迎えた1994(平成6)年、向学心のある後輩のために奨学金を贈ろうと発起したことに始まる。

▶ 2006-15

社学創立40周年目の2006(平成18)年11月、創設40周年記念シンポジウム「社会科学の現代的課題と大学の使命」を開催、創設時の理念「社会科学の総合」の現

代的意義を議論し、その重要性をいよいよ確認した。翌2007(平成19)年、早稲田大学が創立125周年を迎えた年、社会科学部稲門会も設立された。各界で活躍する社学卒業生相互の交流を図ると同時に、現役社学生のための奨学基金活動を継続展開することとした。そして2009(平成21)年4月には、社学は昼夜開講学部と決別して、完全な昼間学部へと移行した。それに伴って大幅なカリキュラム改正を行ない、基盤専門科目と先進専門科目とを設置し、2010(平成22)年4月から、原則すべての科目を半期化した。また2011(平成23)年9月には、英語だけで講義を行なう「現代日本学プログラム」(CJSP)を開設、第一期生としてアジアの国々や地域の出身者を中心に24名の学生が集まった。

*本稿は2016年の創立50周年に際して島善高先生(当時社会科学部教授)によって準備されたものである。

社学 今昔ばなし

木村時夫



編集者から「大部屋時代の思い出」というご注文であったが、社学が発足した当時は専任教員35名（現在は50名）全員が、今の政経のラウンジのある所に在った木造2階建て校舎の一室を研究室に充てられ、同居していたのである。机と椅子はそれぞれ1つずつ割り当てられていたが、そこそすし詰めで、前の机とを仕切る低いカーテンがあって、異様な雰囲気だった。入口に近いところに応接用のセットがあったが、そこでの会話が部屋全体に聞えてきて、研究どころではなかった。

最初の入試は初めてのことで、どんな学生が入ってくるのかわからないというので、当時他の学部では止めていた面接試験をやった。30歳以上の志願者もかなり多く、40歳に近い婦人と面接した若いT講師は、ついその志望の理由を質ねたそうだ。するとその女性は「先生聞いてくれますか」と両手を机の上において、綿々とその流転の経緯を語ってくれたが、その話の長いのにへきえきた、と後でこぼしていた。

10時5分まで 開設当初は火・木の2日だけ授業は午後10時5分までであった。（始業は一律に午後5時20分）当時まだ若かった私は週2回その晩い授業を担当した。終りまで聴いていると、帰る電車がなくなるといって、ひそかに礼をして退室する学生が何名かいた。しかし担当の教員には高田馬場駅までのタクシーが用意されていた。時々はその相乗りの先生を誘って、そのまま新宿に出た。「夜は勉強する時間じゃあないよ」というのが誰かの口ぐせであった。

三十路会(みそじかい)のこと 開設当時、社学と二文の30歳以上の学生を中心に、三十路会というのがあった。会長は文学部の山路先生であったが、ある時私はその懇親会に招かれた。新宿の料理屋の2階であったが、学生のコンパとはちがう、全く社会人並の宴会であった。社学の一学生がその帰途、「私のゼミ論を見て下さい」と言って、私を車中で野駅付近に誘った。そこには建設中の壮大なスポーツ施設があった。某代議士の秘書として、その建築一切を委せられているとか。まだ居残っていた現場の誰彼に、剛快な挨拶をしていた。それが彼の「ゼミ論」だというのだが、教室におけるよりは、彼は外で大きな勉強をしていたのであろう。

別の一人はインテリアデザインの仕事をし

ていたが、「仕事を離れて学校になるとホッとします」といって、帰りによく車で私を送ってくれた。その後も文学部へ学士入学したが、今はどうしているのか。

塩原でのゼミ合宿 その頃はまだセミナーハウスの施設がなかったので、オイルショックの年の暮、塩原の旅館でゼミの合宿をやった。おくれた某君も30歳をこえ、すでにナショナルに就職が定っていた。「芸者の入らぬ宴会は宴会にはならない」とど勝負なことを言って、自分で若い芸者2人を呼んだ。会はそれなりに楽しかったが、北海道出身の若い某君は、そんな会合が初体験であったのか、ひどく若い芸者に心ひかれたらしく、会が果ててから、深夜の氷結した山路を一人下って、町なかの置屋を訪ねたらしい。翌朝、彼はしょんぼりとして、「若い学生さんの来る所ではない」と、つれなく断わられ、昨夜はおそく泣きながら帰ってきたという。「帰りの津軽海峡が危ない」と話合ったものだが、今は元気で札幌のNTTにいる。

慌てものの角帽 学部長をしていた、ある年の4月1日。入学式を終ってしばらくすると、事務長が困ったような顔をしてやってきた。「どうにも困ったことになりました。新入生がやってきて、語学クラスの指定がないというので、調べてみたら、御本人、たしかに合格はしているのですが、発表をみて喜んでそのまま田舎に帰ってしまっ、今日まで入学手続きをしていないんですよ」「それは困ったね。何とかならんものかね」「いや懇めて帰りましたが、途中で自殺でもするのではないかとも思いましたから、希望をもってしばらく待つようには言っておきました。何しろ本人はピカピカの制服に角帽までかぶって、早稲田に入ったことをとても喜んでるらしいですよ」

翌週草々に教授会を開いて、「慌て者だが、いい学生のようなだから」と説明して、右の学生の入学許可を提案した。諸先生も爆笑して私の提案を了承したので、異例の入学が許可された。

香典泥棒 ある年の夏、社学の谷馨先生が亡くなりました。先生は万葉集、ことに東歌に造詣深い方であった。私は教務主任だったので、事務所の人たちと協力して、ご自宅での告別式を

済ませた。それから数日して私は事務所に呼び出された。警視庁から刑事がきていて、谷先生の告別式の際のお香典が、そっくり盗まれたというのである。その前後、知名人の告別式で同様の事件が頻発したので、警視庁では内偵を進め、容疑者をつかんだらしい。その手配写真を見せてもらって、私も事務所の職員も思わず「アッ」といった。それは告別式の当日、早くから先生の甥と称し、黒の礼服まで着て、受付の廻りをウロウロしており、私も会話を交した男である。しかも夜に入って、香典の整理を終ったばかりの、学部の職員のところへやってきて「奥様からのおいつけです」と言って、香典全部を受けとっていった男だったのである。「この右わきのホクロに記憶がある」と私が証言すると、刑事は「やっぱりこいつだ」といって自信をもって帰っていった。数か月後、この犯人はつかまったが、お金は返らなかったらしい。いやな思い出である。

八重桜の下 昭和46年も大学紛争に明け暮れた。5月にはそんなこととは無関係に、演博の前の八重桜が満開になる。そんな或る晩、私は本部との連絡で、忙がしくその花の前を通りすぎた。花の下では社学の学生が数名車座になって酒宴をやっている、かなりメートルを上げていた。「学部長どうです？一杯やりませんか」と陽気に彼等は私を呼びとめた。学生はいいなあと、その時つくづく思った。「折角だが、いまそれどころではないんだよ」と言って別れたが、今もあの花が満開になると思う。私もいつかあの花を賞でながら酒盃をと。しかしまだにそれを果していない。

思い出すまま草創期の社学のあれこれを綴ってみた。大学紛争の忘れることのできない苦しい思い出や、学部内制度改革についても、多少の手柄話めいたことなど、ないではないが、いつか改めてそれらについて書くこともあろう。

☆

☆

社会科学部50周年の際に、社会科学部報を抜粋する形で、これまでの社学のあゆみをwebsite上にまとめた。

社会科学部は2016年4月、創設50周年を迎えました。

当初、存続すら危ぶまれていた社学でしたが、「社会諸科学の総合、学際的な教育・研究」の理念のもと、教職員・学生・卒業生たちの熱い思いが結集して、今日の隆盛を見るに至りました。ここに社学50年の歴史を振り返り、更なる躍進への礎としたいと思います。(websiteより)



社会科学部
History 1966-

大学と社会学の主な出来事

(1966-2021)

- 1966 **社会科学部誕生**。学費・学館紛争勃発。第二政治経済学部、学生募集を停止。
- 1967 16号館竣工。第一・第二理工学部、西大久保キャンパスへの全面移転を完了。大隈庭園を学生に開放。
- 1968 第二理工学部廃止。学生相談センター設置。
- 1969 追分セミナーハウス(現:軽井沢セミナーハウス)竣工。
- 1970 本庄校舎竣工。建物・校舎の号館表示を変更。
- 1973 第一政治経済学部を政治経済学部、第一法学部を法学部に、また第一商学部を商学部へ改称。学生乱入により学部入学式を中止。
- 1974 昭和19年3月卒業者(学徒出陣の世代)に対し、大隈講堂で卒業証書授与。
- 1978 産業技術専修学校廃校、早稲田大学専門学校開校。
- 1979 早稲田中学・高等学校、系属校となる。
- 1980 商学部入学試験問題漏洩、発覚。
- 1981 エクステンションセンター設置。17号館竣工。
- 1982 早稲田大学本庄高等学院開校。創立100周年記念式典。
- 1987 人間科学部、人間総合研究センター設置。
- 1988 日本語教育研究センター設置。オープンカレッジ開設。
- 1989 キャンパスツアー開始。
- 1990 大隈ガーデンハウス竣工。
- 1991 総合学術情報センター(現:中央図書館)開館。人間科学研究科設置。
- 1993 アメリカ合衆国大統領ビル・クリントン氏来校。
- 1994 **社会科学部研究科設置**。
- 1996 メディアネットワークセンター設置。
- 1997 **カリキュラムの履修モデル(井桁モデル)導入**。アジア太平洋研究センター設置。
- 1998 **14号館竣工。社会学が昼夜開講となる**。大学院アジア太平洋研究科設置(研究科9月入学開始)。會津八一記念博物館開設。中華人民共和国江沢民主席来校。
- 2000 **学際研究入門など新設**。総合研究機構・プロジェクト研究所設置。オープン教育センター設置。
- 2001 専門学校を芸術学校に改称設置。
- 2002 早稲田大学系属 早稲田渋谷シンガポール校開校。
- 2003 **ゼミナール2年次春から設置**。スポーツ科学部設置。川口芸術学校設置。
- 2004 国際教養学部設置。学部初の9月入学を開始。政治経済学部国際政治経済学科設置。8号館・27号館(小野梓記念館)竣工。
- 2006 26号館(大隈タワー)竣工。大学院スポーツ科学研究科設置。
- 2007 創立125周年。第一文学部・第二文学部を文化構想学部・文学部に再編。理工学部を基幹理工学部・創造理工学部・先進理工学部へ再編。大隈講堂改修工事完了。
- 2008 63号館竣工。「西早稲田キャンパス」の名称を「早稲田キャンパス」に変更。
- 2009 **社会学が昼間学部へ移行**。現行の**カリキュラム体系**に。早稲田大学系属 早稲田摂陵中学校・高等学校誕生。「大久保キャンパス」を「西早稲田キャンパス」に名称変更。
- 2010 高等学院中学部開校。早稲田大学系属 早稲田佐賀中学校・高等学校開校。
- 2011 **現代日本学プログラム(CJSP)を開設**。2010年度卒業式・大学院学位授与式中止。2011年度入学式中止。東日本大震災復興支援室設置。14号館横に杉原千畝レリーフ設置。
- 2012 WASEDA VISION 150 発表。
- 2013 大学院国際コミュニケーション研究科設置。グローバルエデュケーションセンター(GEC)設置。クォーター制を導入。
- 2014 **コンセントレーション(特定テーマ研究)開始**。
- 2016 **特定テーマ研究、アカデミックカテゴリーに衣替え**。先端社会科学研究所設置。**社会科学部創設50周年**。
- 2019 **グローバル入試(ソーシャルイノベーションプログラム~TAISI)創設**。
- 2020 コロナ禍のため2019年度卒業式・大学院学位授与式、2020年度入学式中止。
- 2021 **文部科学省知識集約型社会を支える人材育成事業にソーシャルイノベーション・アクセラレートプログラムが採択**。

歴代専任教員

(教授・助教授・専任講師・准教授)
*数字は着任年/任期付教員含む

- 1966 新井清光 井内雄二郎 池島宏幸 植田捷雄
大谷恵教 大畑末吉 大畑弥七 岡野光雄
掛下栄一郎 木村時夫 栗山昭一 弘法春見
小林茂 佐藤和夫 佐藤忠夫 霜田美樹雄
鈴木弘 高瀬礼文 竹川裕淑 竹下英男
田中由多加 田村貞雄 出口保夫 時岡弘
中内正利 難波田春夫 長谷川洋三
服部弁之助 原田謙一 福山仙樹 本戸啓嗣
松原正 桃井金台 山之内光躬 芳野武雄
- 1967 谷馨 原祐三 森乾 横尾登米雄
- 1969 中林瑞松 中山末喜 長谷川茂
- 1970 青木茂男
- 1972 大平金一 小野俊夫 高橋悦男 速川治郎
武川忠一
- 1973 照屋佳男 永安幸正
- 1974 岡澤憲夫 佐藤敏光
- 1975 大島英樹 田村正勝 常田稔
- 1976 高橋勉夫 東後勝明
- 1978 池田雅之
- 1979 大西泰博 坂口博一 辻義昌
- 1980 吉賀勝次郎
- 1981 小山慶太
- 1982 成富正信 土方正夫
- 1983 笠羽映子 那須政玄
- 1985 辻隆夫 浜口登
- 1986 浦田秀次郎 上沼正明 後藤光男 輪湖博
- 1989 今村浩
- 1990 篠田徹 内藤明 吉田和夫
- 1991 島善高 清水敏 西野伸一郎
- 1992 トーマス・ジョセフ・コーガン 東條隆進
西原博史 野口智雄 長谷川信次 若松新
- 1993 弦間正彦 中野忠 畑恵子 久塚純一
- 1994 井上正 坪郷實 富田清美
- 1995 赤尾健一 早田宰
- 1996 厚見恵一郎 大森真紀 葛山康典
鷲津(池田)明由 劉傑
- 1997 多賀秀敏
- 1998 有馬哲夫 土門晃二
- 1999 林正寿
- 2000 戸田学 トラン・ヴァン・トゥ
- 2002 川島いづみ
- 2003 黒川哲志
- 2004 奥迫元
- 2005 笹原宏之 周藤真也 花光里香 福永有夏
- 2006 小島宏 横野恵
- 2008 山田満
- 2009 菅野浩勢
- 2010 卯月盛夫 佐藤洋一 仲道祐樹 花井みわ
- 2011 北村能寛 重松優
ホートン・ウィリアム・ブラッドリー
- 2012 山口高領
- 2013 池谷知明 及川浩希 小長谷英代
- 2014 須子統太 本多美樹
- 2015 黄斌 笠島洋一 君塚弘恭 吉田敬
- 2016 稻生信男 千葉清史
- 2017 ゲイル・カーティス・アンダーソン 家田修
牛久晴香 島崎裕子 中林美恵子
野澤佑佳子 ドリアンダ・リーラ・プロビ
- 2018 荒井洋一 遠藤晶久 落合基継 下田恭美
鈴木規子 鄭成 寺尾範野 中島健一
中橋涉 藤原整
- 2019 大塚彩美 島田大輔 鈴木俊晴 寺尾隆吉
利根川佳子 新美貴英 古川敏明 棟居徳子
- 2020 阪口正二郎 鄭有希 浜本篤史 平見健太
星野太 堀芳枝 三田泰穂
- 2021 タンシンマンコン・バッタジット
塚林美弥子

2 フォロワー 2 番手戦略を評価する

学部を特色づける戦略をおさらいすると、
社会学の歴史は改革の歴史であったことがわかる。

夜間の第二学部を起源とする社会学は、政経・法・商の影に隠れ、ともすると2番手として埋没してしまいそうになる。社会に近い学部としての学士入学枠の拡大(1987年・記事1)や全国自己推薦入試(1988年・記事2)は存在感を示すための思い切った戦略であった。後者はAO入試の先駆けであったが、これは2番手としての独自の戦略であっただろう。この特徴的な入試制度は定着し、様々な能力を持った地方出身の個性ある学生が集まり、早稲田に活力を生み出し続けてきた。

また夜間学部としてのニーズが低下すると、当時は全国で初めての昼夜開講化(*解説3/記事3)、そして昼間学部化へ舵を切った。こうした改革は全て前例のないものであり、既成の価値観、既存の制度にとらわれない発想をし、改革を実行してきたという自負がある。

近年は英語学位プログラムを導入したが、これは1番手の学部に先駆けての改革である。初期に比べると志願者数も志願者レベルも向上しており、様々な小さな改善を積み重ねてきたことの証であろう。以上、第二学部を起源とする社会学は、常に改革を行うことで命脈を保ってきたともいえるだろう。そして今まさに、次の改革の段階へと差し掛かっているのである。

*解説3

「夜間学部に対する需要が一般的に減少するなかで、社会学部の学生においても授業時間帯を早い時間に繰り上げてほしいという要望が学生、父母から強く寄せられ続けてきました。そうした声に応え、社会学部は授業開始時間を86年に4時限(14:40~16:10)へ、さらに本年度から3時限(13:00~14:30)へと繰り上げ、授業時間を多様な生活実態に対応出来るように変更して来ました。

しかし、こうした自主的な改革を行っても、『夜間学部』として設立が認可されているため、いわゆる『夜間学部(第二学部)』としてのイメージが払拭されていないなど、誤解が相変わらず存在することも事実です。そこで、永年の懸案であった夜間学部としての名称を取り除くため、関係諸機関との折衝の結果、このたび文部省より夜間の時間帯だけで卒業に必要な単位が取得出来る設立当初の体制を堅持することを要件として、社会学部は98年10月15日をもって、現在在学中の学生から『昼夜開講学部』へ移行することについて承認が得られました。」

(当時の那須政玄学部長による「社会学部の昼夜開講学部への移行について」(1998.10.15)より抜粋)

これからの社会学

Question

社会学が生き残るためには、どのような戦略を考えるべきなのか？

苦学生今は昔「昼の時間もったいない」

早大・中大 昼夜開講に

消えゆく「夜間部」



働きながら本場としてニートな人材を生んできた大学の「夜間部」が、姿を消しつつある。その代表格だった早稲田大学社会科学部（東京都新宿区）が卒業から昼夜開講制に移り、中央大学の四つの学部（八王子市）も〇〇年度に夜間部の廃止を断念することになった。勤労学生がほとんどいなくなったうえ、高学歴化が進み、社会人の学習場が今般に移りつつあることが背景にあるらしい。多くの苦学生たちが築き上げてきた長い歴史があるだけに、開校とも夜間だけの歴史でも卒業できる朝は寂しくすまぬ。

早稲田大学社会科学部は十月、文部省から昼夜開講学部への移行が認められた。同学部は一九六六年に第二政治経済学部、遊藝学部、遊藝学部を統合して開設。昼間学部の二部としてでなく、専任教員がいて、社会に開講するものなら何でも進修できるというユニークなカリキュラムが売り物だった。ミュージシャンや俳優など、個性ある卒業生を送り出している。ところが、大学側の調査で、正社員として企業などで働いている学生が全体の

（文部省）文部省の全国大学一覧によると、全国約六百校のうち、現在夜間部を設けているのは国立二十三、公立七、私立六十三の計九十九校。ただし、この数字には、昼夜開講制で主として夜間に授業を行うコースも含まれている。一、

外的環境のため、空き教室を削減せざるを得ず、大教室が使えなかった。群馬、同学部を卒業した女優の小川純子さんは「ハーサルの合間、出席を減らして講義を受けるため方々よく行った。主婦やフリーマンの人たちもいた。今後もうろんな世代の人が物産できるような

一九九一年、大学設置基準の大綱化（緩和）で大学の昼夜開講が認められたから、純粋な夜間だけの学部に加え、合格者が専任人員を下回るケースも出てくるなど、受取生の学力低下も問題になっていった。同大学の夜間部は戦前からある。学部は六〇年代ごろいまでは昼間十人以上の専任教員を擁出し、最悪裁判士の強制開講者が輩出した。

五九年度で、元日評選事務局長、稲田寛吾さんなどは在学中、昼間は速読で荷物を運び、夜は授業に出た。「昼間は体を動かして夜は頭を動かして、働かながら学ぶことは当時、当たり前」で語っている。

記事3

朝日新聞1998年12月16日朝刊
勤労学生の減少、高学歴化などの背景を踏まえて、夜間学部のニーズが低下して、昼夜開講へ移行することを報じている。社会学が大きく舵を切った時期。

社会人の学士入学枠を拡大

早稲田大学社会科学部 役の若手も、かねて、夜間部（旧社会科学部）の学士入学枠を拡大する。夜間部は、六部以上の学士入学枠を拡大する。夜間部は、六部以上の学士入学枠を拡大する。夜間部は、六部以上の学士入学枠を拡大する。

ほとんどの見られなくなった。このため、社会人受け入れの枠を拡大するとし、専任教員がほとんどいない夜間部も廃止されることになった。

記事1

朝日新聞1987年7月10日
勤労学生の減少を受けてとられた戦略。学士入学の社会人枠の入試を拡大することが報じられた。その後10年を経て、昼夜開講へと舵を切ることになる。

私はコレで早稲田に入りました

受験生本人が自分の二苦三苦を語り、手紙で（奥で）早稲田大学社会科学部の新しい入試「自己推薦」の第一回合格者十九日、発表された。口頭試問の科目は「自己推薦」の第一回合格者十九日、発表された。口頭試問の科目は「自己推薦」の第一回合格者十九日、発表された。

コンクール入賞・狂言・棋士の卵「自慢」実る

記事2

朝日新聞1988年12月20日朝刊 26面
全国自己推薦入試を導入したこの年の暮れ、各紙はこの入試の進進にしがたって繰り返しこの制度のことを報じた。

3

カリキュラム ver.X

「社会科学の総合化」は学部の一貫したテーマ。
試みてきたことは多岐にわたる。

政経・法・商を基礎に、社会諸科学の知をいかに総合化するのか。そしてそれをカリキュラムとしていかに具現化するのか。それを学生といかに共有し、深く授業へとコミットさせるのか(*解説4)。これらの命題は常に目の前にぶら下がり続けている。

カリキュラムの変遷は先人たちの苦心の跡を物語る(右ページ)。何を考え、何を意図して、そのようなカリキュラムとなったのか。これまでの試みから学べる点が多いはずである。

また学生にとっては、履修可能な科目の多様さは魅力であるが、履修方針がないと散漫な結果となる。教員は、そんな懸念を受けて、科目カテゴリーの設定(コア、基盤、先進など)、科目セットの設定(特定テーマ研究としてのコンセントレーション。のちにアカデミックカテゴリーに名称変更)などを行って、カリキュラムの体系を学生と共有しようとしてきた。

現行のカリキュラムにおける科目カテゴリーの設定、履修の段階設計は50年余りの試行錯誤を経て編み出されたもので、大事にすべきフレームである。今日的な観点からこれまでの試みを振り返り、繰り返し再評価を行うことも必要であろう。

目指すべきは、総合的な知の体系をくぐり抜けた学生自らが設定した問いへの思索を深めることで、その領域に至るための場やプログラムを作ることであろう。

*解説4

定期試験がなくなると、大学生はまじめに勉強するか。早大社会科学部が、こんな「実験」を今年度試みている。講義はさぼってばかり、勉強するのは年二回の試験前だけといった学生の目を覚まそうと、定期試験をやめ、各教員が講義の出席点や抜き打ちテストなどで成績をつけ始めたのだ。学生たちは「つまらない講義を何とかしろよ」と不満をいいながらも、出席率はアップした。冬休み明けの授業が始まったが、果たして単位が取れるかどうか、心配顔の学生も多い。授業は六、七百人が登録しているのに出席者はせいぜい百数十人。広い教室の前の方はガラガラ。これが昨年度までの光景だった。そんな学生たちを驚かせたのは、昨年四月、「学生諸君へ」と題する田村正勝学部長名の掲示だった。カリキュラム改革に触れたうえで、「諸君が過剰なく授業に出席し、受講・勉学に励まれんことを期待する」というげき文だ。

続いて例年七月と一二月の各二週間、授業を休講にして設けていた試験期間をなくす方針が打ち出された。期末の定期試験にこだわらず、教員が授業期間中に随時工夫し、多角的に成績を評価せよというのだ。

「定期試験制度は『試験さえ乗り切れば』という学生の受動的態度を生む。教員も評価方法や講義の工夫を怠りがちだった。年間を通じて学生と教員の緊張感を取り戻そう、というわけです」と、教務主任の那須政玄教授は解説する。(略)
(朝日新聞 1994年1月10日 夕刊11面)

Question

社会科学の総合化はどこでどのように具現化されるのか？
カリキュラム体系？授業の場？学生の頭の中？

カリキュラムのうつりかわり

社会学は常にカリキュラム改革を続けてきたことがわかる。①は1970年、創設5年目の学部報での「カリキュラム改正」。選択必修、演習科目、社会科学総合など大掛かりな改変が行われている。90年代末以降は、昼夜開講、14号館建設、昼間学部への転換と状況が変わる中で、カリキュラム改革も目まぐるしく行われてきたことがわかる。②は1997年の学部報に示された通称〈桁折モデル〉。縦軸に学問分野が並び進むところを、横軸の問題群が串刺していくイメージ。③は2000年、社会学入門の新設を知らせるもの。その2年後の2002年の④は翌年からのゼミナールの充実化、2年次開講を知らせている。



① 社会学部報第4号(1970年3月発行)



② 社会学部報第34号(1997年4月発行)



③ 社会学部報第38号(2000年4月発行)



④ 社会学部報第42号(2002年9月発行)

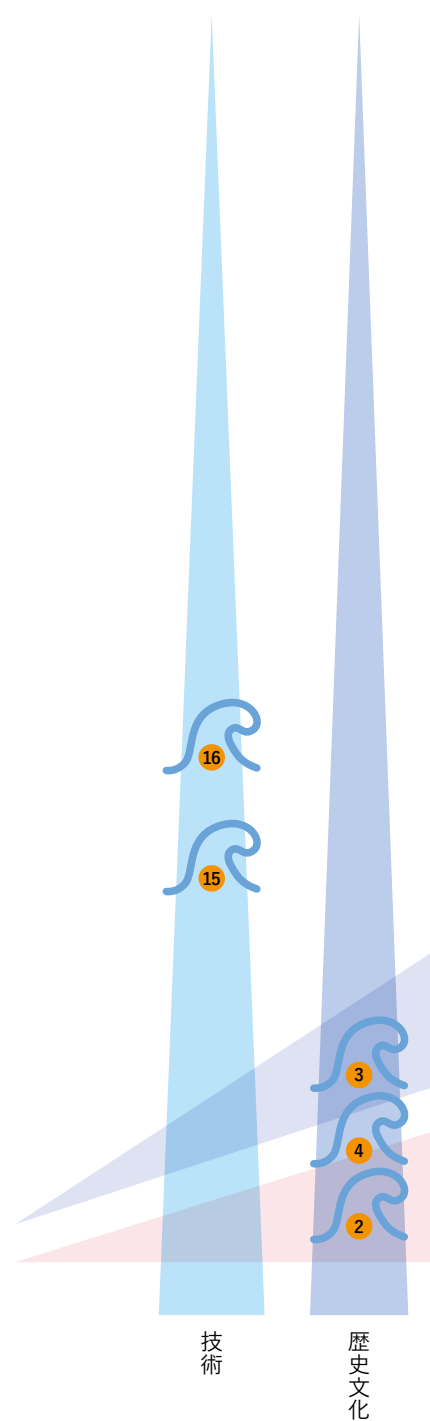
社会学がかぶっている

社会科学は経験科学であり、近年さらに①エビデンスが重視されるようになってきている。人類の歩みに関する②グローバルヒストリー、世界の多様性をめぐる③文明間対話、④文化的知性が問われている。平和・国際協力は、⑤グローバルガバナンス、⑥人間の安全保障が重要課題である。環境サステナビリティから、⑦人新世という認識、⑧エコロジー経済学、⑨社会・経済・生態システムのレジリエンスが重要である。その中で現代の社会デザインは、社会的包摂、⑩ケアの倫理による新しいつながり、⑪持続可能なスマートシティが重要である。組織のマネジメント、⑫社会イノベーションは、⑬オープンイノベーション、⑭マルチステークホルダーによるコレクティブインパクトが期待される。技術は、⑮AIによるディープラーニング、⑯ビッグデータによるデータ科学が進歩し、学習のあり方は、⑰垂直(専門の熟達)と水平(越境による新たな知)による知の重ね合わせと学習の動機づけ、⑱公共政策のコレクティブ・ラーニング(学び合い)、⑲状況に埋め込まれた学習、具体化したラボ、⑳ポストコロナにおけるスマート学習も新しい課題である。

- ① エビデンス志向 ガイアット(1992)
- ② グローバルヒストリー オスターハンメル(2014)
- ③ 文明間対話 リンチ(2007)
- ④ 文化的知性 ハーマン(2007)
- ⑤ グローバルガバナンス ヤング(1999)
- ⑥ 人間の安全保障 ハック(1994)
- ⑦ 人新世 クルツツェン(2006)
- ⑧ エコロジー経済学 コスタンザ(1991)
- ⑨ レジリエンス社会生態システム フォーク(2006)
- ⑩ ケアの倫理 ギリガン(1982)
- ⑪ スマートシティ カラグリウ(2011)
- ⑫ 社会イノベーション ダシン(2011)
- ⑬ オープンイノベーション ホイジン(2011)
- ⑭ マルチステークホルダー コレクティブインパクト カニアとクラマー (2011)
- ⑮ ディープラーニング ルカン他(2015)
- ⑯ ビッグデータによる学際社会科学 ボイド(2012)
- ⑰ 「越境」(水平的学習)と「熟達」(垂直的学習) エンゲストローム(1987)
- ⑱ 公共政策のコレクティブ・ラーニング ヘイッキラ(2013)
- ⑲ 実践コミュニティの中で状況に埋め込まれた学習 レイヴとウエンガー (1991)
- ⑳ 2021スマート学習環境(オンライン化上限60単位撤廃)



垂直的学習



技術

歴史文化

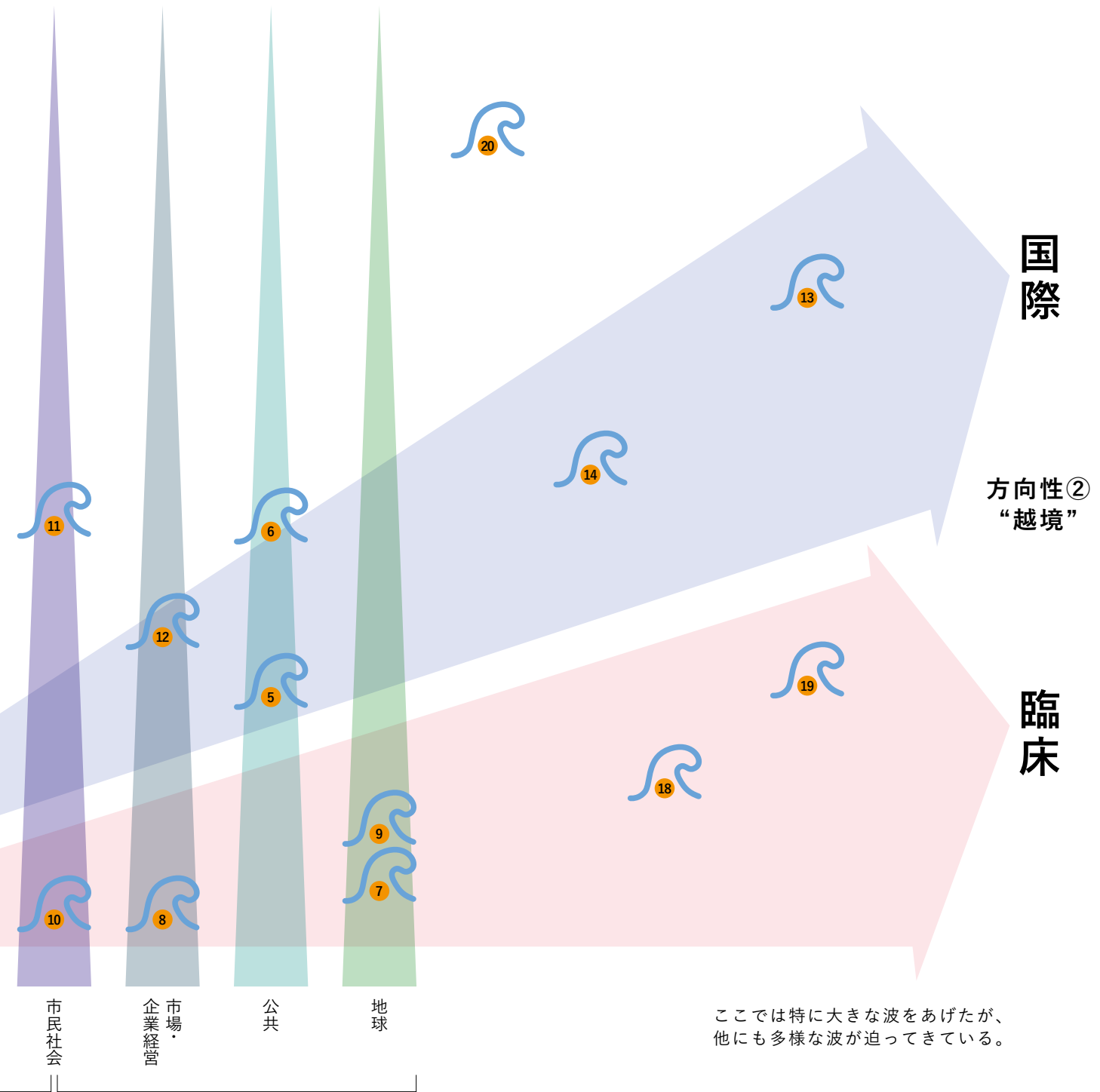
文理融合

20の新たな波

1

水平的学習

方向性① “熟達”



国際

方向性② “越境”

臨床

ここでは特に大きな波をあげたが、他にも多様な波が迫ってきている。

社会科学学際

学際

Society 5.0 における学際性の 知の重ね合いを議論する場の実現 学び合う手法の開発

2024宣言

社学の存在意義は〈学際性〉をもって各分野の知を重ね合い、社会に還元すること、それを担う人材を育成、輩出することにある。その実現のためには、知の重ね合いを議論するコースの設立、学び合いを実現するための手法の開発が不可欠である。

文明技術の発展とともに分業化がすすみ、現代社会では効率性が重視されてきた。これには、分業により分野間のコミュニケーション欠落を生み出す負の側面も否定できない。例えば、環境破壊問題は、各分野間コミュニケーション不足の状態、各分野を統合した結果の合成の誤謬であることは否めない。

現代的状況を踏まえ、社学はその学際性をアップデートしていく必要がある。各分野を深く探求する「タテ」展開を基軸にしつつも、分野間でのコミュニケーションを実現し、分野間の知の重ね合いの「ヨコ」展開を実現する人材を育成・輩出する義務が社学にはある。

このような問題意識から、一つの大きな社会の諸問題に対し、複数の学問分野から横断的にアプローチすることを意識したカリキュラムの整備が必要である。多様な専門分野がともするとバラバラになりがちだった社学を横断的なコースによって1つにつなげてゆく。以上が、コース設立の意図である。

また、コースは、ヨコ展開できる人材を育成する場であり、そこでは、ともに学びあうことを目的とした学びの機会(コレクティブ・ラーニング)を提供する必要がある。社会科学の知見に基づいてその手法を開発し、協働、議論、対話を基礎とした社会科学のコミュニケーション能力を育成する。

アップデート

2



